

## 保育部会

(和泉部会長)

こんばんは。会を進めていきます。

このようなアンケート結果も含め、事業計画を県へ報告していくうえで、十分な保育に関する支援を行っていくぞ、という決意の思いをここに出し、それを十分お聞きいただくことで、野々市の保育が変わっていくのではないかと思います。

定員の話ですが、中央保育園はなくなってヴィテンへ、という意識等もありましたが、中央保育園も残り、来年2つの園が新設されるということもあります。ここしばらく、大きな流れを野々市としても抱えなければならないだろうと思います。

ここまでの3、4年の間にも、新しい保育園ができています。いくつか大きな流れの中で、考えていかなければいけないことばかりだろうと思います。

(事務局)

先ほど、クロス集計の集計結果を報告いたしました。

そこで出てきているのは、就学前・小学生ともに、就労希望という方が多い、という結果が見られます。保育を利用して、働きながら子育て、ということを考えていらっしゃるなかで、定期的な教育や保育のニーズは高いのではないかと考えられます。

細かい集計を見ますと、野々市市としてこれからどのようなニーズにこたえていかなければならないのか、ということで、そのあたりの課題がいくつかあるのかな、と思います。

子育て支援センター、そして、児童館の利用の集計から見ますと、未就園児の利用していない比率が69.9%となっています、そのあたりは、利用方法がわからないのか、行き届いた情報提供の在り方というところが今後の検討課題にもつながってくるのではないかと考えています。支援センター利用を年齢別にみると、0歳児から2歳児の利用率が高いです。

現在より多く利用したい、といったところの0、1歳児を見てみると、これから先も子育てに関する不安・悩みを相談できる場として期待されている、と考えられるのではないかと思います。やはり今後も、地域拠点事業の充実をより一層図っていく必要があるかなと思っています。

今後の児童館の利用については、意外な数字が出ていて、0歳児の方が今後児童館をより多く利用したいという回答がクロス集計で62.4%と出ていて、このあたりが思いがけない数字だなと思っています。他市町のように、児童館と支援センターが連携して、お互いに遊びの場を提供していく必要があるのかなと思います。

もう一つは、子育てに関して日頃悩んでいることや気になることとしては、低年齢児は、食事や栄養に関することが、6割近くの数値となっています。0－2歳が、食事や栄養が多いというところで、保健センターの力を借りながら栄養士、そして病気・発達・発育と

いうところは、保健師さんの力を借りての保護者支援に臨まなければならないのかなという数値も出ています。子育てに関して日頃悩んでいること・気になることが問 25 にありますが、この数値をみると、「ストレス等から子どもに強く当たってしまう」さらに、「自分の時間が充分にとれない」というのが3割あります。やはり、子育ての悩み・不安を感じる人の比率も高まっているのではないかと、というのが問 25 から伺えました。今後も、相談支援・情報提供の推進が必要ではないかという、ニーズ調査の結果が見られます。

(和泉部会長)

事務局の方から、大きくは2点報告いただきました。一つ目は、子育て支援センターと児童館を比較されました。

子育て支援センターと児童館の需要の度合いに、皆さんの予想を上回る、あるいは下回るものがあつた。

それでは、支援センターを統括しているお立場としてはいかがでしょうか。

(委員)

いろんな季節的な行事等を提供しているのですが、同じように児童館も、例えばクリスマスだったり七夕だつたりの行事の制作を行つたりして、それぞれが同じような対象としてやっていることがあります。あつちが何している、こつちが何している、というような情報交換はしていないので、一回私達も考え直して、私達の施設というのは、遊びの提供というよりも、親子関係の構築を重点的にしないといけないねというところで、今までは魅せることを重点的にしてきたのだが、今後ともに、それがきっかけで親子のつながりを深めていくという行事に変えていかなきゃいけないねと、今年度職員間でそのような反省をしまして、次年度からそういうふうに変えていこうと思っています。

やはり児童館の方は遊びを提供したり、そういう場を提供し、支援センターは、親子支援、親子のつながりが深まるような、関係づくりができるようなイベントをしていかなければならないかなと考えています。

(和泉部会長)

子育て支援センターと児童館の果たす役割についてですね。

(委員)

例えば、親御さんは今日、遊ばせようと思って行きました。しかしセンターが行事していたら、行こうと思つても入れません。実際に今日、ひな祭り制作をしたのですが、普通に遊びに来た親御さんは、今日イベントだったので午前は入れなくて、午後から遊びに来るという状態でした。その姿を見たときに、4月からそのような形でやってきたのですが、はたと考えて、いつでも子どもを連れて楽しませようと来た親御さんが入れるような環境

にしないといけないね、と話し合ったところでした。支援センターは、いつでも遊びに来てそういう場を提供しないといけないな、と。イベントというところから切り離して、反省をしたところですよ。

(和泉部会長)

現実、保育園を運営している先生方は、今のような支援センターの切替えについてどう感じますか。

(委員)

保護者の方には、少し大きい子が児童館に遊びに行くという傾向が強いですし、支援センターの方はやはり低年齢児の方が多いのかなと思ったのですが、先ほど児童館のクロス集計で0歳児の利用が高く、ちょっと意外だったのですが、そのあたりはいかがでしょうか。ある程度、行政の方で、活動の区分というものがあってもいいのかなと。

(和泉部会長)

ニーズ調査で62.5%まで出るとは思いませんでした。

きっと他市町では、図書館等との併設ということで、支援センターと図書館が一緒になっていたりとか、いろんなところで、今後、児童館と子育て支援センターで遊びと支援という、また保健センターでの支援、そういったところの情報を交換しながら、ニーズに応えなければならぬのかな、というのが課題かと思います。

児童館に対するイメージと支援センターに対するイメージが、それぞれ親御さんの中にはあるんですね。こうして見ると、児童館に対しては、何か楽しいことやっているから行こうかな、という感じがあるのでしょうか。

(委員)

日頃、お母さん方とお話している中では、児童館と子育て支援センターというものの区別がなかなかついていないようです。

だからこそ、アンケートのなせる技だと思うのですが、児童館はどういうものですか、子育て支援センターはどういうものなので、どういう人達が行ったらいいですよ、というような情報が全くない中でのアンケートだったので、今のような、小さいお子さんも児童館にもっと行きたいわ、というニーズ調査が出てきてしまったのではないかなと思う。

その点は、私達の課題として、今後、この事業計画を進めていく中で、市民の皆さんにはっきり分かるように、もっと情報提供をきちんとしていかなければいけないな、と受け止めました。そのまま児童館のニーズが小さいお子さんに高いというふうに、そのまま受け取るのも、バイアスとしては難しいのかな、と思います。

(和泉部会長)

私は他市町の児童館の実情をお聞きしたのですが、結局児童館さんが遊びの提供ということで、色々回っているということで、お便りも児童館から、「0歳児のおたより」等、毎月お便りが出ています。1歳さんの今月のおたより、2歳さんのおたより等。遊び、健康面、などいくつか分野を分けて出されています。

(委員)

同様に支援センターでもそのような情報提供は出していますか。

(委員)

子育て便りは出しています。計画的な、どちらかというと行事計画のようなもので、何曜日はどういう計画があります、遊びに来てください、というような、月のお便り、というような情報提供が多いです。

(委員)

私は、子どもが3人いて、上の子がお世話になったのですが、最初、引っ越してきて、子どもがちっちゃくて、まず行ったのは支援センターでした。最初の子の時は、育児サークルも一つしかない状況だったので、その支援センターにすごくお世話になって。子どもが大きくなると、支援センターでちょっと動き回ると、小さい子がいて危ないので、大きくなってくると、スペースも大きいということで児童館に。

でも、支援センターの方が、やはり友達づくりや情報交換としては、先生もすごい親切で、相談する側も相談しやすい。逆に児童館だと、自由に走り回れたり、駐車場も広かったり、行きやすかったり。上の子がいるとどうしても、支援センターは大きい子はダメ、というイメージがあって行けません。3人目になると、子育て支援センターに全く行かなくなるので、児童館に行くようになるんですけど、児童館も夕方になると、小学生のための、という形があるので、皆帰ってしまいます。

(委員)

支援センターも、17時までしているのは菅原だけで、他は14時頃までで終わってしまいます。児童館は、朝から夕方までやっている。時間的なものも利用の問題なのかなと思います。3時までしている支援センターが終わったら、菅原に来て、それが終わったら児童館回る、というように、渡り歩いている方もたくさんいらっしゃいます。

保育園・幼稚園に行っている人はダメですよ、としている支援センターもあります。そういうところでは年齢の幅が狭まってきて、行けない、という方もいます。

(和泉部会長)

どういう規定を設けているか、ということがかなりありますね。そういうものを全部取っ払って、全く自由に、どんな形であれ利用できるというのはできない訳ですね。

そうしますと、このクロス集計から見えてくる、未満児の児童館を利用する姿等、思わぬものが見えてきました。そして、開設時間・開館時間のようなもの。そして対象年齢のこと。いくつも出てきました。児童館と子育て支援センターのすみ分け、それから、金沢のように、二つが手を取り合って保育園回りをしている、という状況もある、と。これは一度整理をしていかなければなりませんね。

きちんと年齢を分けてお使いになった方もいらっしゃる。一方で、子育て支援センターのイメージは、何か問題を抱えた時に行くけれども、気楽に遊ぶのなら児童館よ、という保護者の方も年齢を問わずいらっしゃるかもしれません。少し気になる状態でも持っていざしたら、児童館へは行きませんね。支援センターへ行きますわね。ニーズと提供する側のうまいマッチングが、そこそこで少しつまっていたりしてるのかもしれません。

(委員)

保育園の会合などで、未就園児の親御さんがいらした時に、日中であつたり普段の様子をお話させてもらうのですが、思った以上に、センターとかの利用が少なかったです。たまたま行事が少なかったりとか、児童館と支援センターの役割がわからないから、どうしても「どんどころだろう」というところが想像ができないので、まあいいか、というようになり、足が向かないのかな、と。そういうことをよく聞きます。

気軽に行けるようなところを、私たちも色々な情報がわかっているとお勧めできるし、現実的に児童館と支援センターをはっきりと区別を、私も知識的なところが明確でないの、なかなか、親御さんにも伝えられないところも実際あります。

(委員)

駐車場ですが、支援センター菅原は15台しか止められないんですよ。月に、900～1000人のお子さんがいらっしゃるんですけど、だいたいほぼ満車です。それ以上の利用となるとどこかに駐車場を確保する必要があります。

(委員)

駐車場が狭いから、行かない、という人もいます。出にくいし、危ないし。保育園だと、広い駐車場で入りやすい等、あると思います。

(委員)

公立保育園がどんどん少なくなっていく中で、その跡地を支援センター等、広いスペースを確保できる、そういう施設にしてほしいな、という要望があります。

(和泉部会長)

中央保育園の跡地はどうなるのですか。

(事務局)

これから皆さんのご意見を聞きながら、また検討していきたいと思います。中央保育園の跡地も、旧栗田保育園の跡地もありますので。

(委員)

こちらに来て初めて思ったのが、なんで公立の幼稚園がないのだろう、と。幼稚園は私立しかなくて。その時転勤したばかりで、保育園は、職の見込みがある等でないと入れなくて。では、幼稚園しか入れるところがない。しかし、私立しかなくて、私立だと月に3万円弱かかるんです。県外では、月に公立だったら3000円～5000円でしたが、なぜ野々市にはない、と。今の幼稚園でも奨励金みたいなのが出ているのですが、転勤族が多い幼稚園なので、なぜ野々市はこんなに大きいのに公立の幼稚園がないのか、と。どんどん保育園ばかり増えるのに、なぜ幼稚園はないの、と。

(和泉部会長)

公立は白山市に西と東にあるが、今度ひとつに統合されます。それから、加賀市にもあったのですが、閉園に近い状態。ほんとに今言う公立の幼稚園は少ないのです。金沢には一つもない。あとはどうでしょう。私は、加賀市と白山市の他に、あとは知らないのです。

(委員)

公立、私立、よりも野々市には幼稚園が少なすぎると思います。たったの2園でしょう。

(和泉部会長)

アンケートの結果からは、公立を望む、という回答の数字が多いです。このことに、市当局がどのようにお考えを持っていच्छやるか。今、小松市、白山市は雪崩現象のように、民営化の流れが大きい。

(委員)

保育園もそうですよね、どんどん民営化の方に進んでいく。行政がそれだけの経費を使えない。そうしたら、民間に、教育とか子育て支援を頼むならば、補助金でどんどん支援すべきだと思うのです。

野々市市はあまりにも幼稚園が少ないですよね。保護者の立場でいえば、先ほど費用のことおっしゃいましたが、就園奨励費が大きいのです。

野々市市は他の都市と比べてどうでしょうか。金沢市は補助金が多いのですが、野々市

市は特に幼稚園に対しての、補助金がないのです。そういう面で、市は、幼稚園教育とか転勤族の大きな会社等いっぱいあるでしょう。そこに来る保護者のニーズをもっととらえるべき。だから、児童館とか子育て支援センター等そういった支援も大事ですが、教育をしながら、保育をお願いしながら子どもを育てたい親を支援してほしい、と私は思います。

(和泉部会長)

今、子育て支援センターにプラスして出てきましたのは、幼稚園の存在、についてのお話でした。たしかに、定員と人数をこうして見させていただくと、野々市に幼稚園が少ないよ、といわれても、これは両方とも私立でありますので、ここにどんどんお願いしていきこうとなったときに、利用料の問題が浮上してくる。公立の幼稚園があった場合、もしかしたら、この430人の定員に対して、273人来年度はおいでになるんですが、これをとんとんまでもっていくとすれば、公立の幼稚園がもし存在すれば良いのですが、なかなか難しい。

(委員)

野々市市が市立の幼稚園を造るにはお金がかかりますよね。だから私立に流していく。それであれば、もっともっと市が私立を支援していくべきだと思います。

(和泉部会長)

そういう話が出ますと、幼保連携型認定こども園への移行を、と言いたいのでしょうか？

(委員)

もしそうしたならば、認定こども園として成立できるように、保育を認定した子どもを必ず回しますよ、と約束するならばそれはできます。そうでなくて、ご自分たちで集めなさいという感じだと、またそれは違ってきます。

(和泉部会長)

幼稚園を経営される方の大変忌憚のない意見です。

(委員)

今一番厳しい時です。新制度3法で、幼稚園・保育園の世界がめちゃくちゃしていますものね。それでいて、スケジュール表を見ても石川県は遅れがちなのですよ。

国自体がはっきりしていない、単価も出ていない。なのに、あなたたち手を挙げなさいといっても、どこでどうしたら良いのやら。支援というのは、就労支援の部分だけではなく、親が親をできる支援、というところに目を注いでほしいなと思います。

(和泉部会長)

一定期間は親としての役割を果たして一歳児神話ではないですけども、やはりそういう期間が保障されないと、そういう場合の支援がやはり難しい。

今、ずっと調べてきたのは 親の就労というものを中心にして道を辿ってくるのが、今度のこのニーズ調査の国のやり方だったものですからね。

(委員)

就労したくても、ここに来て、子どもがいて、すぐ仕事を見つけて、というのが出来ないのに、保育園に相談に行っても、決まっていないと入れてもらえません。幼稚園しか入れるところがない。でも、幼稚園に入れて、2時にお迎えに行かなきゃいけないのに、転勤族なので何かあった時に頼れる人がいないので、仕事もできない。そういう状態で、本当は働きたいのに幼稚園に、という方もいらっしゃると思います。他に選択肢がないのですね。

(委員)

就労支援と子育て支援を一緒にしてはいけないと私は思います。子育て支援と名がつく限り、子を育てる親を支援することかなと思うのです。その親が就労を望むならば、就労しやすいように援助をする。しかし、子育てに専念したいという親もあるんですね、そこを手当て等で、行政でしてらっしゃるのかな、というアンケートがほしいですね。

(和泉部会長)

今、保育の量の認定等、さまざまな認定をしていく仕事や、条例の策定などしなければならぬこともたくさんあります。

これらのところに、今のようないくつかの点を反映しながらやっていかなければならないと思いますね。比較的幼稚園の少ない市ですので、その声がどのように届いていくのか、ということも、やはり興味深いところかもしれません。幼稚園協会に入っているといっても、2園ですものね。

(委員)

幼稚園もどんどん子育て支援を入れているんです。やはり夏季休暇とか、なかなか幼稚園もそれに全部応えることはできないので。そういう意味では、在籍していても、長期休暇の間の支援もあっても良いのかなと思います。

(和泉部会長)

このアンケートから関連するというならば、親御さんが、幼稚園も夏期の休暇等をなくしてくだされれば良い、というような意見もありましたね。

これは、そんなさまざまな流れの中で、一応認定こども園という方針を出して、できればそちらの方向へ、という国の方針なのでしょうけれど。何回も出てきて、何回もぼしゃって、何回もこの一体化を話題にしてきた、その結果を今私達が受け止めなければならない、そしてこの回がスタートしたわけです。

子育て支援センター、児童館の関係、そして、保育園・幼稚園、本当に子育てをしたい親を支援するその形、公立を望む意向があるということも、そここで見えたアンケートでございました。

二つ目に移って良いでしょうか。子育てに関する悩みにおいて、(問 25) 日頃悩んでいること・気になること、ということで、25%以上あったのは、病気や食事・発達に関すること。気になるお子さんを持つということも含まれるでしょう。食事・栄養、これは低年齢の子にそうだと思います。それから、子どもとの時間を十分に取れない、子どもの教育に関すること。下の方に行きまして、自分の時間が充分に取れないこと、ストレスなどから子どもにきつくあたること。これらが 25%超えていていると。いくつ丸をつけても良かったんですよ。その中でこういう結果をお母さんたちがお出しになりました。

相談相手としては、夫というのは当然です、そうでないと大変なことになりますから。自分の親、というのが出てきた。また、幼稚園や保育園の先生というのも、大変頼りにされているという事実も見えてきました。こういう不安をどんな形で反映させていくかというのが、役所の大きな役割となります。

(委員)

私は、もう 40 年近く前に子どもを育てましたので、今のお母さんの世の中のこととかとだいぶずれていると思います。子育てが楽しくてしかたなかった。仕事よりも子育てが大好きで、勤めてないで子育てに専念してきたので、仕事をしたい、という人の気持ちがよくわからないのですけれども。

子育てに関する悩みのところで、相談する相手が、私達の時代は、近所の先輩たち、おばあちゃんたちに、「うちの子こんなや、こんなや」と言ったら、「皆そうや、こうや」と、教えてもらってホッとして、子育てを一生懸命していたという記憶があるのですが、今ここには、そんな人は入っていないのですよね。先生とか、そういう方が多くて。

ご主人、配偶者に相談できるのは最高だと思います。私達のころは、配偶者は相談相手にならなかった。

井戸端会議で輪になって、子どもと一緒に遊ばせながら、お互いに話したり、先輩とかに話したりして、道路の隅っこなどでちょっとしゃべって、色んなことで悩んでいたのが、スーっとして、家に帰って、“がんばろう”という気持ちで子育てしたり、あとは、親に電話して聞いたりしたんですけど。そういうのがなくて、今、本当に。やはり子育ての先輩達に聞くのが一つの案だと思うので、そういうところがあったらいいと思いましたけどね。

(和泉部会長)

近所の人というのは、12.8%は一応あるのですが、それでも本当に少ないです。つまり、近隣の方々と本当に気持ちを分けあって生活する、という今の社会の仕組みがないですから。特に、若い親達の問題もあります。

(委員)

だから、このアンケートに載せてある人たちは、すごく子育てに一生懸命な人ばかりが載せてあるから、色んなことで悩んだり、色んなことを求めたりしているが、全くこれに回答していない人たちは、どうでもいいや、と思っている人もいるのかなあと思いながら、もうちょっとアンケートに対する回答の数があると良かったなという気持ちもあります。

今日、ずっと聞かせてもらって、専門家の人がこれだけ頑張って一生懸命考えていらっしゃるのに、アンケートの答えはこれだけか、と少しさびしく感じました。

専門家でないので、難しいことはわかりませんが、母親として3人の子どもを育てて、また今は、民生委員・児童委員として学校や保育園等と関わっているだけの人間なので、難しいことは何もわからなくて、一生懸命聞かせてもらって勉強しようと思って来たのですが、そこだけがちょっと、心に引っ掛かりましたね。

(和泉部会長)

私達はアンケートの回答率が5割、よくぞここまで、と思っていたのですけれどねえ。

(委員)

今の時代は、そういう時代なのですね。

(委員)

役員会で、書いて、と皆に頼んだのですが、もっと身近な問題を解決してほしい、という意見が出ました。

例えば、医療費を、野々市はレシートを集めて書類を書いて持っていかなければならないんです。それを保育園のお母さんとかは、持っていくのが面倒だから、申請するのをやめる、とか、持っていく手間がすごく大変、と聞きます。こういうアンケートがあると、希望のところに書くんですけど、野々市に来て14年経ってもかわらない。保健センターの人にも、なんでこんなに面倒なのですか、と。なんでこんなに野々市遅れているんだろう、と。

(和泉部会長)

申請をしなければ何も動かないという体制。これは、少し情緒不安を持つ方とか、少し

力量に届かない方は、申請ができない。私達はこう思うんです。申請しなきゃ払われないなら、町も市も助かっているな、とか思ってしまうのです。

そうではなく、保険証持っていけばなるというふうにして、広く恩恵を、皆さんにおあげすべき、と私も思います。

(事務局)

金沢市では、自動償還払いといいまして、自己負担月 1,000 円というのは同じなのですが、超えた部分については、市役所にいかなくとも勝手に振り込みになる、という制度がありますので。なんとか当市もそういう方向性になればいいなと思っていますが、ただ、それは市だけの問題ではなく、医師会との話にもなってきます。

(和泉部会長)

今、支援センターと児童館の役割も、どんどんお伝えいただいて、頼りになる、楽しいところ、とわかってくると、心が楽になるのですから。ぜひそういう私達への伝達も、やっていただいて、こういうものがスムーズになるといいですね。

(委員)

発達・発育や病気等の相談があるのですが、発達が遅れている、というお母さんの悩みをよく伺います。今、私達は保健センターと連携して、遊びの教室等に通わせていただいて、支援センターの方から出向いて行って、そこで心理士の先生や保健師の先生と一緒に親子かかわりながら、そのあと継続してこちらで引き受けながら、一緒に相談していくんですけど、やはりそのお母さん方の中から、そういう悩みを相談できるところがない、と聞きます。

保護者の方の要望で、ぜひそういうところで、相談ができるシステムを、野々市はなさすぎる、というのを言われていまして。私も今、できるだけそういうお母さんがおいでた時には、寄り添うようにはしているのですが、やはり、同年齢の他の人と相談できないのですよね、なのでぜひ。また施設ばかり作ってはいけないのですが、人それぞれ色々な悩みを持っているので、この会議で検討できたらいいのかなと思います。

(事務局)

先ほど話があったように、なかなか、転入してきてすぐには保育所入れない、という状況が見られています。保育所に入所している方は、既に勤務先決まっている方がほとんどで、求職中の方は入所が難しい場合があります。

野々市市は、民営化だけでなく、新しい園をどんどん造っているのですが、それでも追いつかないということは、おそらく潜在需要がかなり多いのでは、というところがありまして、27 年度から新しく 2 園できます。ただ、この 2 園で足りましたね、と本当になるの

か、というところが多少疑問を感じています。

(和泉部会長)

いわゆる待機児童をどう読むか、ということですね。

あったら働きたいのだけど、ないから家にいて子どもを見ている、そういう人は待機児童に入らないというのがありますので、待機児童をどのように読み込むのかということをしちんとやって、本当に充足できるかどうか、というところ。ある意味では、この子ども・子育て支援会議の根本にかかわるところです。きちんと充足ができていますかどうか、と。そのあたりの見極めをやっていかなきゃなりませんね。

いかにも空いているように見えますけど、7、8園は定数を超過していますでしょ。だから、超過している園もいくつもあるのを見ますと、必ずしも安穩としてもいられないのが、野々市かもしれないなど。

本当に見えない待機児童をいっぱい抱えることになって、本当に、野々市どうなっているんですか？と言われるときに来た時には大変です。

21%も他市町村に行っているのです。この子たちはどこに行っているのか、ということと、ある意味本当にやむを得ないから、と他市町村に行っている可能性もある。

逆に、金沢市、白山市の子を受け入れているという現実もある。しかし20%の子が他に行っている。

(事務局)

保育園の場合は、40人位は他市町に行っていて、10何人が来ているという現状なのですが、この20%というのは、当市外の幼稚園も含むのかなと思います。近隣の幼稚園に行っ

(和泉部会長)

幼稚園の数がここに入っていますね。

(委員)

お母さんの中には、上の子は、保育園に預けたいけど、下の子はもっとゆっくり見たい、だけど、働いてないと預かってもらえないから、やむを得ずどこかにお仕事に行かなきゃ、という声も聞いているので、そこらへんは、先ほどの幼稚園の希望というのも、市内にあれば、近隣で預けられるのかなと。今日感じました。

(和泉部会長)

皆様のご意見をこうして出していただくと、色々なことが見えてきますね。これをまた、いい方向をぜひ見つけていかなきゃな、と思います。保育の質も高めていきたいです。

そして、いわゆる、こういった行政が旗をふってやらなきゃいけないことも、ぜひ野々市らしいものにしていきましょう。

これで第2回目の子ども・子育て会議を終わります。